

ASF NEWS
ALL SEIGAKUIN FELLOWSHIP NEWS

& Seigakuin

No.
57
Jun. 2019



特集

聖学院とSDGs

誰一人取り残さないために



message

ご挨拶

学校法人 聖学院
理事長

清水 正之



プロフィール

1947年横浜市生まれ。東京大学文学部倫理学科卒業後、同大学院人文科学研究科倫理学専攻修士課程修了。同博士課程単位取得退学。博士(人文科学)。2008年聖学院大学文学部教授に就任。2015年聖学院大学学長に就任。2017年学校法人聖学院理事長に就任。

2023年に迎える創立120周年と、さらにその先を見据え、聖学院は2018年、長期ビジョンの策定を行いました。そのビジョンにおいて「誰一人取り残さない」世界の実現を目指すことが宣言され、2018年4月にはSDGs達成を推進するグローバル・コンパクトに署名、加入しました。その根底にはやはり「神を仰ぎ 人に仕う」という精神があります。この「誰一人取り残さない」世界の実現を目指して、という宣言は画一的なものではありません。各校各園で発達段階があるため、それぞれの個性と多様性をいかした形での「誰一人取り残さない」あり方になります。

例えば、幼稚園では、外国人の子どもたちの受け入れと共存が社会課題になりつつあります。子どもたちの中で、個性を持って生きていることに対する感受性と寛容性を育むことが「誰一人取り残さない」ことの実践になります。小学校では、オーストラリアとの短期交換留学を行っています。中高では、学習を通して知った貧困、差別、環境問題を知識で終わらせるのではなく、それに対して何ができるのかを考え行動するところまで進めます。その一つとして、男女共同で行なっているパラスポーツを広く知ってもらうプロジェクトがあります。大学は、SDGs自体の歴史的意味合いも考えるべき場です。国際的な目標の成り立ちや社会的背景、現代の様々な価値観の中で一つの目標を人類が持つことの意味を理解する必要があります。

これらの取り組みの先に2つの大きな目標があります。

一つは大学のユニバーサル化です。現在大学ではグローバルキャンパス化が進んでいます。各学年100～120人位の留学生がいて、まさに大学自体がグローバルな状況です。人的、文化的多様性に加え、「学び直し」などの社会の要請に答えられるよう、学びの質や学生の受け入れ体制を整えて機会を増やしていく必要があると考えます。早稲田大学は、一般の学生の定員を2万名から1万5千名に減らして、5千名は社会人と留学生を採ると宣言をしています。一橋大学も、「社会人の大学への招き」を学長が宣言しています。聖学院大学も自らの特徴を生かしてユニバーサル化に対応する必要があります。

社会との連携という点でさらに言えば地域貢献もその一つです。キャンパス内のグローバルな環境を生かすのであれば、留学生がどのように地域に貢献するかということがこれからの課題だと思います。今後、ますます日本で生活する外国人は増えていきます。その局面では留学生に独特の意味付けが生じてきます。外国人の中に単純労働力、技術職などのレイヤーが生まれて、留学生は知的な層になります。つまり大学

で学んだことによって、日本で生活する外国人の中でのリーダーとなることが期待されます。そのモデルを上尾や埼玉で作っていくことが聖学院が地域でできることだと思います。また、昨年、政治経済学部で講演会を開催したところ、上尾市の方にたくさん参加していただき大盛況でした。今年は、SDGsについての講演会を開催する予定です。さらに大学院は来年以降に公認心理師の養成課程設置の計画があります。この計画に伴い、市民に向けて相談室を作ることが必要となりますので、ここからも地域貢献は進んでいます。

ユニバーサル化は大学だけに留まってははいけません。中高も同じように地域にどう開いていくかという大きな問題があります。大学での実践課題を中高、小学校に還流していく必要があります。そこでもう一つの大きな目標は各校各園が垣根を超え、聖学院が一体となる体制作りです。この目標は今回聖学院ビジョンを作る背景としてありました。まだビジョンを策定してから1年ですが、理事会の運営も「学院として一体的に考えましょう」という雰囲気が出てきて、話し合いが前向きに進むようになりました。同時に、各校の持っている問題点が見えてきて、それにどう向き合うかという段階に入ったと言えます。これは相互理解が深まったことと解釈しています。

また現場でも垣根を超えた取り組みが様々に進んでいます。例えば地域連携の会に中高の先生と生徒が参加したり、中高のボランティア活動に大学のボランティアセンターが協力しています。お互いが何をしているのか関心を持つ機運が出来つつあります。

もちろん画一化ではなく、あくまで各校それぞれの個性は大事にしつつ一緒にできるところは協力するという協働です。多様性を認めながらも包括する、まさにダイバーシティです。

聖学院として全体で一つの方向に向かっていくことで「誰一人取り残さない」ということが具現化され、地域へ、日本へ、世界へとつながっていくことを目指します。

聖学院ビジョン策定から1年、ようやく礎を築くことが出来ました。SDGsとの関わりを含めて、生き残りではなく、良き聖学院の持続的な発展と社会的な意味の再構築であると皆さんにご理解いただければ幸いです。またキャンパスの再整備や校舎の立て直しなど、具体的な目標が見えてきております。ついては、皆さんの各々のお立場から学院への関心を改めてお持ちいただき、また同時に発展のためのご支援を共感と共に賜りたく存じます。

CONTENTS

01

ご挨拶

03

特集：聖学院とSDGs

05

&Talk [聖学院大学 × 上尾市]

07

&Talk [聖学院中学校・高等学校
×
女子聖学院中学校・高等学校]

09

focus-SDGsと教育 [聖学院幼稚園]

10

focus-SDGsと教育 [聖学院みどり幼稚園]

11

focus-SDGsと教育 [聖学院小学校]

12

focus-SDGsと教育 [女子聖学院中学校・高等学校]

13

focus-SDGsと教育 [聖学院中学校・高等学校]

14

focus-SDGsと教育 [聖学院大学]

15

在校生の活躍 / 卒業生の活躍

17

新任教職員の紹介

21

Seig NEWS

24

Our Mission

35

聖学院歴史探訪



特集

聖学院とSDGs

世界の課題



SDGsとは？

2015年9月、全国連加盟国（193国）は、より良き将来を実現するために今後15年かけて極度の貧困、不平等・不正義をなくし、私たちの地球を守るための計画「アジェンダ2030」を採択しました。この計画が「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals: SDGs）」です。SDGsは、ミレニアム開発目標で十分に手を打てなかった課題に加え、Rio+20で議論された深刻化する環境課題など17の目標と169のターゲットに全世界が取り組むことによって『誰も取り残されない』世界を実現しようという壮大なチャレンジです。

（出典：グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパン WEBサイト <http://www.ungcnj.org/>）

2030アジェンダが掲げる17のゴール

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS 世界を変えるための17の目標



貧困、飢餓の問題だけではなく教育のことや性的マイノリティ、ワークライフバランス、消滅可能性都市の問題など日本でも身近な問題が取り上げられています。このようにSDGsは、直接、間接を問わず世界中の人々の生活に関係している課題です。

国連広報センターより引用

教育の課題

聖学院のビジョンとSDGs

SDGsの日本での認知率は社会全般で14.8%（電通「SDGsに関する生活者調査」2018年）です。この認知率の低さの根底には、世界的課題は自治体や企業が取り組むもので個人には関係ない、という認識があるように思います。

しかしSDGsは遠い国の話ではなく、日本の個人生活にも関わる課題です。例えばミツバチの減少問題があります。ある研究では世界の農作物の主要な作物種の7割の受粉はミツバチによって行われていると言います。そのミツバチが大量に減るという問題が起きています。その理由の一つは農薬で、日本では海外で禁止されている農薬がいまだに規制されていません。この農薬を散布した畑周辺の蜜を集めたミツバチが巣ごと死んでしまっています。ミツバチがいなくなると農作物も作れなくなり日本の食料自給率はさらに下がります。

上記の電通の認知率の調査では共感度も調査しており、その数字は73.1%と高いものでした。つまり認知が進めばアクションにつながる可能性が高いことを示しています。SDGsにおける教育の役割はアジェンダの一つである「教育」に取り組むことだけでなく、教育を通して社会課題に目を向ける力を養うことです。ここに教育と聖学院のミッションがあると考えます。

SDGs対談

聖学院大学 × 上尾市

& Talk



上尾市と聖学院大学、地域連携を通じて 共に目指す未来の形について伺いました。

上尾市と聖学院大学は どういう連携をしているんですか？

佐藤 上尾市と聖学院大学とは包括協定という形で繋がっています。また学生が市の事業のボランティアにも協力してくださったり、先生方は審議会や協議会のサポート員として入っていただいているというのがありますのでいろいろな連携があります。

渡辺 旧来の地域連携は、例えば行政に関わる委員会が作られた時に、大学からも委員として人を出したりするだけでした。今は、大学としては学生の学びの場としての地域連携が非常に大きくなってきています。一方、市や地域の方々は学生の若い力とか発想力に期待するところがあり、どちらかがお願いする側というよりお互いのリソースを活用する形になっています。上尾市と学生が一番密接に絡んでいるボランティア活動もその一つです。今、上尾市のマスコットキャラクターとしてアッピーくんが活躍していますが、アッピーくんの着ぐるみを学生

※Icafe…1号館地下にある多目的スペース。プレゼンテーションやワークショップなどに活用されている。ボランティア活動支援センターの窓口もある。

が借りて、保育所やいろいろなところを回ったり、上尾市の施設やIcafe*に置くパンフレットの作成を請け負ったりしています。

佐藤 このあいだ大学の八木ゼミの学生たちが市内のいろいろなお店を巡って、オススメの店舗を紹介する冊子を作ってくれました。上尾市にはスポーツ施設が多いので中高生の大会も多く開催されます。学生たちは、中高生たちが大会帰りに何を食べたらいいか、というコンセプトから制作してくれました。以前はもっと単純なボランティアだったんですが、徐々に自分たちの考えや行動が加味された活動に広がっている気がします。

地域連携でこれから自治体が 大学に期待することはどんなことですか？

佐藤 ファシリテーター的な役割があるといいなと思っています。例えば地域課題について役所側と地域の人たちで話すと、要求する側



渡辺 正人

・聖学院大学事務局長

聖学院大学基礎総合教育部教授。女子聖学院短期大学助教授、聖学院大学人文学部日本文化学科を経て現職。専門は古代文学と考古学。学長補佐・大学事務局長として教育改革、産官学や地域連携の業務も担う。



佐藤 光敏

・上尾市総務部職員課 副主幹

上尾市役所総務部職員課副主幹。上尾市国際交流協会副会長。上尾に「まちの映画館」をつくる会代表。大学時代、「国際政治から自分たちの生き方を考える」をテーマにゼミで学んだことから地方公務員を志す。勤務の傍ら市民活動にも参加している。

と受ける側の攻めと守りみたいになってしまいます。でも大学の先生など見識ある人や学生がそこに入って論点整理などをしてくれれば、納得する解にたどり着くんじゃないかな、と思ったりしますね。そういう役割をどうやって作っていけるかということは、一緒に考えていきたいです。

それから、サテライトキャンパスを上尾の駅前ですることができるといいですね。まだ上尾ではSDGsについてきちっと取り上げられていないので、大学のサテライトキャンパスのようなものを作って教えていただいたりとか、取り組みを市民の方にお伝えしていただけたらいいなと思っていますね。

渡辺 実は、そういう声がかかることを期待して、この4月にSDGsの専門家教員を政治経済学科で採用しています。

佐藤 そうなんですか。

渡辺 ええ。大学あるいは法人としても本気で取り組みますっていう姿勢を打ち出す目的の一つです。それと同時にSDGsという言葉は聞くけど、どんなものなの？っておっしゃる方もまだまだ多い状況なので、講座などを開催して知ってもらう目的があります。

佐藤 ぜひぜひ上尾の駅前でも。僕もそういう講座を作りたいなと

思っていたんですけど、なかなか機会がなくて。大学にそういう先生がいらっしゃれば、ぜひお招きしたいです。じゃあ、それは駅前、もしくはここ（聖学院大学）で。笑

お二人にとってSDGsとは何ですか？

佐藤 SDGsって私たち自身のライフスタイルがすごく関わってきていて、かつ、根底にはこの世界の中のみんを包摂するという概念があると思います。なので、やらなきゃいけないという他人事的な義務感でやるのではなく、自分も社会に所属している意識をもって、「自分らしく生きていくために」という、すごく前向きな姿勢が大事なのではないでしょうか。みんながここにいていいという認識の上に、それぞれができることを積み重ねていかないと持続可能にはならないんじゃないかな、と。そこへの発想の転換みたいなものが必要かなって思うんですね。

渡辺 確かに一人ひとりのライフスタイルに関わってますよね。SDGsは、今そこにある問題を一つひとつ解決して、より多くの人が幸福に暮らせる社会を実現するためにありますし、次の世代にどうやってバトンを渡していくかという問題でもありますよね。17の目標と169のターゲットを見ていくと、本当に身近な問題が取り上げられてることがわかります。だから、SDGsっていう名前を使わなくても、目の前の課題に向き合っていること自体がSDGsを語っていることにはなると思うんですね。

佐藤 その視点からいうと市役所は個々のゴールにずっと取り組んできたっていう思いがあると思うんです。でも違う分野のことまで含めてイメージできてるかという、それはどうかなと思います。でもSDGsにはそういう俯瞰的で包括的な観点も必要、というか持たざるを得なくなるところがあると思います。

渡辺 そうですね。SDGsが大きくそれをくくってくれたことで、いろいろな人を巻き込みやすくなってきたっていうのが、よく言われることなんです。やっぱり、シンプルにそこが一番大事だと思います。巻き込み力って最近言われるようになってきていると思うんですけど、SDGsは目標に向かって巻き込んでいく力は大きいな、と思うんですね。

佐藤 昔、環境問題というと「30キロ先だって自転車でいけ」みたいな、便利=悪というイメージがあったと思います。でも今は技術が発達して便利な上に環境にもいいというものも増えています。冷蔵庫にせよ買い替えることで電気使用量が少なくなったりとか。重要なのは単純に安いとか便利ということだけじゃなくて、その向こう側にある結果を見極めながらチョイスしていくということかなと思います。表示されている情報を積極的に見たりしながら。それが「その企業に対する応援だ」という気持ちでできるとすごくいいですね。学校も同じように、SDGsの視点がある大学だから地域の人たちが応援してくれたり、学生も「そういう学校だから成長できそうだ」という風にチョイスするようになるといいと思います。だから、街としても、住んでもらう人たちに選ばれるように、自分たちを開示していく必要があるのかもしれないですね。

&Talk



**駒込キャンパスの中高が、男女合同で企画運営しているパラスポーツプロジェクト。
今、様々なところで注目されています。**

パラスポーツプロジェクトとは どういうプロジェクトですか？

児浦 パラスポーツを広めることを目的としたプロジェクトで、女子聖学院中学校・高等学校（以下女子聖学院中高）と聖学院中学校・高等学校（以下聖学院中高）の有志の生徒が参加して活動しています。

加納 そもそもは、私が別のパラスポーツの魅力を届けるプロジェクトに関わった際、価値観が大きく変わったことがきっかけでした。そのプロジェクトを通して「障がいを抱えている／いない」、「普通の人と違う」ではなく、各々が抱えているものを各々で活かしていくことが大事で、一般的には「弱さ」と言われているものが「強さ」となって輝かせられるのではないかと思います。その体験から、児浦先生に声をかけ2017年秋に聖学院でもプロジェクトをスタートさせました。先月（2019年3月）までに3つのステージを行いました。

1つ目のステージでは、パラスポーツの魅力を届ける映像を制作しました。2つ目のステージでは、障がいを持つ選手への応援方法を考え

て、男女50人の生徒が色々なパラスポーツの大会に出向きました。例えば、ブラインドサッカー*では、声を出さない応援法を考えなければならなかったり、各々の障がいを持つ選手に届く方法を考える必要があります。生徒たちは、そもそも応援とは何だろう？と考え、本当に相手の立場を理解して企画を立てていました。その際、ヘイスターズの元応援団長を招き、会場全体を巻き込めるような工夫を凝らすこともやりました。これは大いに盛り上がりました。

児浦 注目されましたよね。

加納 3つ目のステージでは、生徒の中での気づきと、高齢者問題や福祉関係、雇用問題、街のバリアフリーといった社会課題に貢献できる活動に発展させる目的がありました。

生徒たちにはどのような変化が見られました？

加納 はい。一つは、「普通って何だろう？」という疑問が出てきたことです。自分たちで「普通」を決めてしまうから、それ以外は「違う」と



児浦 良裕

- ・広報部長
- ・21教育企画部長
- ・国際教育部長

1974年生まれ。東京理科大学理学部第一部数学科卒業。ベネッセコーポレーションで16年、営業、商品企画、研究開発、マネジメント職に従事し、中高教諭に転職して6年目。担当教科は数学・情報。広報部長・21教育企画部長・国際教育部長。教育モットーは「井の中の鰻物、大海に出る」で、社会と生徒とをつなぐ教育を大切にしている。2016年9月フジテレビ「ユアタイム」で授業を取材され、全国に放映。



加納 由美子

- ・英語科教諭

女子聖学院中学校・高等学校 英語科、パラスポーツ応援プロジェクト担当、生徒会顧問。横浜市出身。青山学院大学文学部英米文学科卒業。英語教育学専攻。好きな言葉は、「Keep your eyes on the stars, and your feet on the ground.」(目を星に向け、足を地につけよ)。その言葉をモットーに、生徒の個性・創造性が発揮され、心を育てる授業を目指す。

なってしまう。この「普通」という概念がなくなったら、もっと公平・公正な社会が作れるのではないかと生徒たちは考えるようになりました。

もう一つは、あるアプリを開発したことです。元々は障がいを抱える人たちのために、街のバリアとなる段差や狭い場所を地図に書き込む企画でした。地図作成のために生徒が街を散策していて次のようなことに気づきます。バリアとは社会にあるものではなくて、自分たちの心の中にあるのではないかと。困っている人を助けることが出来れば、物理的バリアは心のバリアフリーで解決できるのではないかと。その結果、障がいを持つ人が、「私は今ヘルプを求めています」と発信し、その信号を受け取った周囲の人が助けに行く「助け合い」アプリの開発が始まりました。

児浦 男子の場合は、成果やお金儲けに価値を見出す人が少なからずいましたが、彼らの視野がすごく広がったと実感しました。アプリ開発に関わった一人は、ビジネス系のキャリアを目指していましたが、今では教育分野のキャリアを目指しています。結局、社会を作る上で大事なことは、色々な人が幸せになること。「誰も取り残さない」、まさにSDGsの根本思想をごく自然に本音で捉えているんです。すごい成長ですね。

加納 このプロジェクトで大事なものは、成果よりも彼らの中に気づきや価値観の変革が起きて、その仲間が広がっていくことです。彼らが



プロジェクトのHP(左)とロゴ(右)。どちらも生徒がデザインし制作したものです。ロゴは、様々な色や個性を持った人が共存していることを表現し、プロジェクト名の下の赤いラインは生徒たちの情熱と決意が込められています。コンセプトも仕上がりがプロ並みです。

社会に出たときに、その価値観を持っている若い人たちが沢山いれば、社会も変わるのではないのでしょうか。

児浦 生徒たちの変革で特に感心したのは、パラスポーツ競技を使って高齢者の健康促進をする、というプロジェクトです。女子のアイディアを元に、社会福祉協議会の方々にヒアリングをして、高齢者の方向けの施設(プラットホーム滝野川)でポッチャ*と一緒にやりました。結果は大成功で、盛り上がっている様は大変素晴らしい、先方からもまたやって欲しい、とご依頼も頂いています。

加納 生徒は、「街を見回しても高齢者の方と自分たちが一緒にわいわいするシーンは見かけない。高齢者の健康促進も大事だけど、そういった場を作っていく方が重要なんじゃないか。平均80歳以上の方が元気に飛んだり跳ねたりするのを見て、一緒にハイタッチをしながら、自分たちもパワーを貰ったし、学ぶことがあった。」と言ってました。よくSDGsの本に書いてある表題よりも一歩先に気づきを得ていることに心を動かされますね。生徒たちの普通の変革とは異なる大きな変革となっていていきます。

ラジオでも取り上げられましたし 様々なところから注目されてますね

児浦 はい。文化放送のラジオ番組に生徒たちと一緒に出演をさせていただきました。そもそもは、パラスポーツ競技の応援を考えるワークショップに生徒と一緒に参加した際、生徒たちの次元の違うはつらつとした動きが、ニュース素材を探しに来ていた番組担当プロデューサーの目に留まったのがきっかけでした。その後出演依頼をいただき、斉藤一美さんの「ニュースワイドSAKIDORI!」という番組に出演し、パラスポーツプロジェクトの内容などをお話しました。

加納 そのラジオを聴かれた方から、まだパラリンピックの種目になっていない立位テニス*と一緒に盛り上げてほしいと連絡がありました。立位テニスの大会の運営から携わっていく動きに広がっています。

児浦 パラクライミング*の日本代表の選手から、SNSに取り上げて欲しいと取材依頼があって、さらに注目されるようになっています。

加納 今では健常者と障がい者が一緒に出来るスポーツという捉え方をするようになって、パラスポーツよりユニバーサルスポーツという言葉が少しずつ使われるようになっていきます。一番のキーは、本来の意味での多様性であったり、それぞれの中で持っている色々なコンプレックスを強みとして活かしていける気づきにつながるのだと思います。その気づきを得れば堂々と自分の良さをアピールできる世の中になっていくと思います。

*ブラインドサッカー…視覚障がいの選手による5人制のサッカー

*ポッチャ…「ジャックボール(目標とする白いボール)に赤・青のボールを投げて近づける競技

*立位テニス…立って行うテニスで障がいによってカテゴリ分けされコートサイズが変わる

*パラクライミング…障がいのある人のクライミング競技で視覚障害・切断・神経障害のカテゴリがある



(上)作るもののイメージをまず絵に描いています。(下)白い紙を洗濯のりで貼るのが一番大変な工程です。

”わたし”から、”わたしたち”へ

「よく遊ぶ よく祈る」。聖学院幼稚園はこの言葉を大切にしながら、日々の保育の中で子どもたちの成長を見守っています。はじめて聖書のお話を聞く子ども、年中さんと年長さんと一緒にお祈りする中で、お休みしている友だちや病気の人のため、困っている人のために祈る心が育まれます。また、子どもたちは「遊び」を通じて様々な感情に出会います。年少さんにとっての遊びは、「自分が楽しい」から始まります。そこから年中さんになると「みんなで」という意識が芽生えます。年長さんになると育ち始めた「みんなで」という意識を開花させ、達成感を得る経験を重ねます。そのプログラムの一つが、毎年5月に行っている「大型製作」です。

「大型製作」は年長2クラスが協力して一つのテーマを決め、大型の製作物を作り、年少・年中さんを招いて遊ぶ縦割り保育のプログラムです。遊びではあるものの、みんなでテーマを決めること、必ずしもいつも遊んでいるお友達ではないメンバーでチームを組み協力することの難しさがあります。年少、年中時代に年長さんが作ってくれた遊びの場や製作物をイメージしながら、自分たちで作りたいものを決めます。一人ひとりの意見はホワイトボードに書かれ、みんなの思いが見えるようにします。自分を主張するだけでなく、人の話をよく聞いたり、待つことも求められます。製作物のデザインが描ける、工作道具を使うのが得意、低学年のお世話が上手といったお友だちの新たな一面に出会い、人間関係が広がります。大変なプロジェクトではあるものの、下の学年のクラスに「開園しました。遊びに来てください」とアナウンスする年長さんの表情は、頼もしく達成感に満ちています。大型製作だけでなく、日々の縦割り保育の中で他者に出会う子どもたち。同じ学年はもちろんのこと、学年の異なるお友だちも含んだ幅の広い関わりの中で、パートナーシップを大切にできる人格へと育てていきます。

聖学院幼稚園

大型製作



小さいお友だちにアナウンス

年長さんにとって大型製作は大変なプロジェクトです。それだけに、完成の喜びは大きいもの。小さなお友だちにアナウンスする場面は、達成感に溢れています。

聖学院 みどり幼稚園

非認知的スキルの育成



みらい募金

未来の幼児教育を支える存在でありたいという思いから"みらい募金"と名付けられました。2018年に40周年を迎え、さらに50年、60年の存続をめざし、支援・協力をお願いしています。

遊びを通して、人を思いやれる心を育てる

「教える」ことを重視する幼稚園は多くあります。それはある意味で保護者のニーズでもあり、社会の一つの流れでもあります。聖学院みどり幼稚園は「子どもには自らを成長させる力がある」という考え方から、過度に教えたり禁止事項を作ったりしません。「子どもは遊び、あるいは子ども同士の関係性の中で自然と様々な力を身につけていきます。そして、興味を持った時に後押しをするだけでどんどん学んでいきます。」と山川園長先生は言います。一見放任のようですがその逆で、先生たちは園児一人ひとりをしっかり観察し、園児が今どういう状態で、何がしたいのか、どういう気持ちなのか「心の動き」をきちんと把握する必要があります。

聖学院みどり幼稚園が身につけてほしいと考えるのは非認知的スキルです。主体性や意欲、自己肯定感や自制心、協調性や共感性などを指します。子どもの時にしっかり遊ぶことで身につく力です。世の中には多様な子どもたちがいます。みどり幼稚園にもご両親もしくはどちらかが外国人である家庭の園児が恒常的に通っています。また、皆と同じ活動をするのが難しい子どももいます。みどり幼稚園の園児たちは違いに気づきながら、それを受け入れています。ごく自然に違いを受け入れられるのも非認知的スキルを重視しているからこそです。

自分や自分の身近な人だけの幸せでなく、社会や世界の幸せを考えられる倫理観や価値観を育むには早い時期からの人間教育が重要です。誰一人取り残さない社会を実現する原点がここにあるのかも知れません。

緑豊かな園庭で、園児たちが明るく元気に駆け回っています。そこには本来の子どもの姿がありました。卒園生が通う小学校の先生方からはよく、「みどりの卒園生は、いじめられてる子がいるとかばってあげられる」と言われるのだそうです。



(上)先生が園児一人ひとりの「心の動き」をしっかりと見えています。(下)園庭で飼っているうさぎの餌も園児たちが作ります。





(上)月曜日と金曜日は全学年が一緒にチャペルで礼拝を守ります。その他の曜日は低学年・中学年・高学年に分かれて礼拝を守ります。(下)お祈りの時。聖書の言葉に耳を傾け、神様の愛を受け止めて1日がスタートします。

聖学院小学校

チャイルドサポーター制度



自分の誕生日に献金

学年ごとに1人のお友だちを支えます。顔写真は玄関に入ってすぐの掲示板に貼られています。会ったことはないけれど、大切なお友だち。世界の課題に対して自分に何ができるのかを考える心を養います。

会ったことのない友だちのために

日本国際飢餓対策機構 (Japan International Food for the Hungry: 略して JIFH) によると、世界で小学校に通えない子ども達は約6,100万人 (*出典: ユニセフ世界子供白書) います。家族の経済的な問題だけでなく、教育への理解や子どもの健康への関心、地域の様々な問題が複雑に絡み合っています。聖学院小学校では、JIFHが推進するチャイルドサポーター制度に賛同し、2016年から支援を開始しました。対象となる国はバングラデシュ、カンボジア、フィリピン、ポリビアです。学年ごとに1名のチャイルドを支援します。サポートするチャイルドは同じ年齢で、学年が上がってもそのまま支援を継続します。そのため、会ったことはないけれど自分たちと同じように一緒に学年が上がって、大きくなっていく身近な存在です。

クリスマスの季節にはチャイルドからカードが届きます。小学校からも全員が一言のメッセージを贈ります。そのような交流を大切にしながら、毎月1回、大切な一人の友だちを支える想いを込めて、自分の誕生日に「誕生日献金」をし、サポーター募金として送っています。

聖学院小学校では毎日8時35分から50分まで、朝の礼拝を守っています。チャプレンをはじめ校長先生や教頭先生、クラスの先生から聖書のメッセージを聞きます。特に11月の収穫感謝礼拝では、JIFHから代表者をお招きしてメッセージを語っていただきます。同じ年ごろであっても、学校に通えない子どもや、1日にスプーン3口のスープしか口にするのでできない子どもがいることを知ると、生徒たちの表情が引き締まるのが分かります。支援することを通して、自分たちも日々生かされていることを学びます。

「互いに愛し合いなさい」という聖書のメッセージは、どこか遠くから響いてくるものではなく、今現実の生活の中で求められている言葉であることを、会ったことのない友だちに想いを寄せながら、心に刻む時となります。

女子聖学院 中学校・高等学校

コミュニケーション英語



共に考え、深める学び

従来の知識伝達型の学びではなく、自分のこととして考える授業を展開するため、テーマの設定や進め方を工夫しています。設問に対しペアで考えたり、教え合う場面もたくさんあります。

社会課題を知ることでも終わらせず 自分事にする英語の授業

イメージとして日本はエコな国だと思っている人も多いと思いますが、日本人は年間1人約300kgゴミを捨てていて、これはアメリカより断トツに多い数字です。コミュニケーション英語の授業では、まず、このことを実感してもらうため、生徒に一週間で自分が捨てたゴミのリストを書かせます。最初は10個くらいしか書けません。でも先生が作った1週間のゴミのリストを見せるとその量の多さに驚き、自分ももっと捨てているゴミがあること、無意識にゴミを捨てていることに気づきます。その後、リサイクルがうまく行って注目されている国の話をします。それがどこの国かが、その日の教科書のトピックスです。すると生徒は興味津々で、ぱーっと教科書を読み出します。この答え、実は江戸時代の日本です。同じ国なのに何が変わったのか？豊かさとは何か、自然と生徒たちの中から言葉が出てきます。読後に江戸時代のエコ生活のアイデアと現在の科学技術を融合させた試作や商品をリサーチし、教科書で学んだ表現を駆使した英語のプレゼンテーションが行われます。以上は一例ですが、語学力だけではなく社会課題、歴史、思考力、プレゼンテーション能力、発信力…様々なレイヤーやチャンネルが凝縮された授業です。

担当している加納先生はこう言います。「まず社会課題を知ることが大事なのですが、そこで終わらず行動する勇気を持って一歩外に出ることが大事だと思います。外に出た時に世界の広がり分かりますし初めて実感が生まれます。世界の広がりを知って自分の世界も広げて、そして身近な人に居場所を作ってあげられる人になってほしいと思います。」

SDGsという言葉を使わなくても、自分事しながら自分の意見につながる授業が構築されていました。



(上) 授業中の発言や回答に対してポイントが加算されます。授業終了後、ポイントカードにスタンプをもらうことで達成感が高まります。(下) 覚えた英語の暗唱をipadに音声入力して教員へ提出。発音や到達度に合わせて評価とアドバイスを行います。





(上) 港近くの酒店は地元の方々の憩いの場。
(下) 真鶴出版の川口さん夫妻と真鶴町役場のト部さん。

聖学院 中学校・高等学校

ソーシャルデザインキャンプ



事前学習

5月中旬のSDC本番に向けて、学校内での事前学習を4月中旬に実施しています。論理的な思考には、問いを立てて質問をすることが重要と考え、質問をつくるワークなどを行っています。

体験学習を通して社会課題に目を向け、 解決の方法を思考する

聖学院中学校・高等学校では体験を通じた学びを重視しており、北アルプスの蝶ヶ岳登山、新潟県糸魚川での農村体験などの体験学習プログラムを実施しています。

高校1年生は総合学習として『ソーシャルデザイン』という取り組みを1年間かけて行いますが、そのプログラムの一部である2泊3日の『ソーシャルデザインキャンプ（以下SDC）』は聖学院を代表する体験学習の一つでもあります。SDCは自分事で社会を見つめ、社会課題を発見し、解決の方法をグループで協働して考えていきます。神奈川県湯河原に宿泊し、「伝統工芸」「商店街」「観光」「漁業」「農業」という5つのテーマに分かれて、熱海市、小田原市、真鶴町、三島市でそれぞれフィールドワークを行います。

「観光」をテーマとしたグループは真鶴出版の川口さん夫婦と真鶴町役場のト部さんの講演を聴いたうえで、実際に真鶴の町を歩き、町の様子を観察し、町の方々とコミュニケーションを通して学びを深めました。SDGsには「働きがいも経済成長も」（目標8）や「住み続けられるまちづくりを」（目標11）という目標があります。真鶴町は神奈川県唯一の過疎地域として指定されており、高齢化や人口減といった大きな課題を抱えています。そんな真鶴町の未来を「観光」の視点から考えていきました。「観光」というと、文化財などの建造物や祭りなどの行事、名産品といったことを思い描きがちですが、真鶴の「観光」のキーワードはクリエイティブやアートにあります。真鶴出版の活躍や町の政策による新しい動きもありますが、20年以上前から町の景観を守るために「美の基準」を策定している町の価値観もあります。生徒たちは講演や実際の体験を通して、「持続可能なまちづくり」について考える貴重な時間をもちました。

聖学院大学

SDGs推進のプロジェクト



国際機構論(西海洋志 准教授)

春学期開講の「国際機構論」では、「国際社会の組織化」という観点から、国連を含む国際機構の歴史や活動、SDGsなどについて学びます。秋学期には「平和学」を開講します。

産学官連携+SDGs推進+ ダイバーシティ推進プロジェクト

食料品の正当な価格について考えたことはありますか？ コンビニに行くと美味しくて低価格なさまざまなチョコレートが販売されています。たったの200円程で本格的なコーヒーを味わうことができます。美味しくて高品質の食料品が安価に手に入ることは、消費者にとってはたいへん良いことのように思われます。しかし、チョコレートやコーヒーの製造の背景には、天候に左右される第一次産品の価格変動を受けた貧困や奴隷のように働かされる子どもたちの姿があります。使い捨て社会に鈍感になった私たちが、自分たちのライフスタイルが地球的な社会課題と結びついているという真実に目を向けなければ、世の中のゆがみは直ることはないでしょう。戦争が起こらなければ平和かと言えそうではありません。ヨハン・ガルトゥングが言う「構造的暴力」のない世界を目指していく必要があります。聖学院大学はキリスト教主義のもと、そうした「構造的暴力」を理解し「積極的平和」について考えるべく、2006年から、政治経済学部で「平和学」の授業を開講しています。そして、聖学院大学がSDGsを推進する根底には「平和学」の学問の礎があります。政治経済学部のオムニバスの科目「社会への扉を開く」は1年次のすべての学生が履修します。高橋愛子先生の回はガバナンスとNGO、そしてSDGsをテーマとしました。学生にレポートを提出してもらいましたが、多くの学生が感想だけでなく具体的なアクションを書いてくれたそうです。政治経済学部が行ってきた授業や活動の実績などのリソースを活かす形で「産学官連携+SDGs推進+ダイバーシティ推進プロジェクト」がスタートします。本年度の後半には、国連職員などを講師として招き、SDGs及びダイバーシティを主題とした公開講演会を複数回、開催する予定です。こうした取り組みを通じ、SDGsに関心の高い地域の企業や行政とも連携して社会への貢献を行っていくことを考えています。



(上)プロジェクトのリーダーの一人、政治経済学部長・高橋愛子 教授。

(下)2018年度には、ダイバーシティを主題とした一連の公開講演会を開催し、地域の皆様にもたくさんご参加いただきました。



カカオ豆の木

ヨーヒー豆の木



五十嵐 健太 (右)
山口 由人 (左)

活躍ファイル *No.07

聖学院中学校 3年
聖学院中学校 3年



簡牛 春菜

活躍ファイル *No.08

女子聖学院中学校・高等学校2016年3月卒業
聖学院大学人文学部 児童学科 4年

SDGs達成に向けて 僕たちにできるアクション

在校生の活躍



▲学生団体Future



▲SustainableGame

聖学院中学校・高等学校ではSDGs推進の要素を備えた授業や課外活動が多く実施されています。その効果があって、2018年の記念祭（聖学院中高の文化祭）ではSDGsをテーマとしたいくつかの展示や企画がありました。その中の一つ、中2の教室でSDGsの展示企画を行っていたのが五十嵐さんと山口さんです。二人はたいへん仲良しですが、現在はそれぞれがリーダーとしてSDGsを推進する別々の団体の活動を行っています。五十嵐さんは「学生団体Future」という団体を他校の高校生たちと立ち上げて、募金活動をしたり、SDGs関連のワークショップを実施したりしています。今年の夏には都内で大きなイベントを開催する予定で、正式に決定したらホームページで紹介するのでぜひチェックしてくださいとのことでした。山口さんは複数の団体でアクティブに行動しています。聖学院の生徒会に所属しており、学内にステッカーを貼ってSDGsを紹介する企画の実施を計画している他、SDGsアクションを技術面からサポートする学生団体「SustainableGame」、聖学院中学校の有志のメンバーで活動している「スクールSDGsプロジェクト」、そして中学生が参加できるイベント情報の提供を行うフェイスブックグループ「SDGs Network U-18」といった団体のリーダーとして活躍しています。山口さんは五十嵐さんたちと、以前に「東京公共交通オープンデータチャレンジ」というアプリ開発のコンテストで東日本旅客鉄道賞を受賞していますが、その受賞作となったアプリ「Smooth Transfers」の商品化も目指しているそうです。二人の今後の益々の活躍が楽しみです。

聖学院は 自分が自分でいられる場所。

卒業生の活躍

弟が生まれた時から子どもが好きで、ずっと保育士、幼稚園教諭を目指しているという簡牛さん。現在聖学院幼稚園で実習の真っ最中です。「とにかく日誌が大変です」と話してくれるその顔には充実感がみなぎっていました。最近では、子どもが今何を考えていて何がしたいのかを多様な視点で想像できるようになり、自分でも実感できるほど成長しているそうです。簡牛さんは中高、大学を聖学院で過ごし、実習や課外活動で聖学院の2つの幼稚園と小学校、男子の中高とも関わっています。「どの学校や幼稚園にも共通して思うことは、みんな優しいし、すごくあたたかい。家とは別の意味で自分が自分でいられる場所です」。聖学院で長く過ごしてきた簡牛さんはそう言います。聖学院メサイア合唱団に入っていて大学の聖歌隊隊長も務めていた簡牛さんは、声量が豊富なため他の実習先で「ちょっと歌声が大きいです」と言われたことがあります。でも聖学院幼稚園では「どンドン歌ってください」と言ってもらえました。特定の基準で測るのではなく、個性としてありのままを受け入れてくれる、だからのびのびと自分が出せる。「自分が自分でいられる」のは、学院全体に浸透している校風ゆえかもしれません。簡牛さんは、合唱団や聖歌隊だけではなく、学友会の特別委員会連合の副委員長、リトリート実行委員会の副委員長としても活躍しました。歌うことが好きで表現することをとても大切にしています。「ありのままを受け入れてくれる聖学院で育ったから、恐れずに自分を表現できるようになれたと思います」。将来は、自分を表現できる子どもたちを育てたいと抱負を語ってくれました。

まだまだあります!

Seig NEWS

学生も生徒も教員も職員も
次のステップへと
日々新しい試みをしています。

学校法人聖学院

清水理事長 インタビュー記事掲載

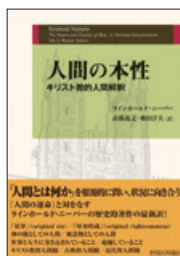
一般社団法人グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパン (GCNJ)、公益社団法人地球環境戦略研究機関 (IGES) が2019年2月末に発行したSDGs日本企業・団体調査レポート2018年度版『主流化に向かうSDGsとビジネス～日本における企業・団体の取り組み現場から～』に清水正之理事長のインタビュー記事が掲載されました。このレポートはGCNJおよびIGESのWEBサイトからダウンロードすることができます。



聖学院大学出版会

ラインホルド・ニーバー著 『人間の本性』

ラインホルド・ニーバー著、高橋義文・柳田洋夫訳、『人間の本性：キリスト教的人間解釈』が4月に発刊されました。この書籍は20世紀アメリカを代表する神学者、政治思想家であるニーバーの名著『人間の本性と運命』の第一巻の半世紀ぶりの最新訳です。第二巻は『人間の運命：キリスト教的歴史解釈』として同じく高橋義文・柳田洋夫訳で聖学院大学出版会より2017年3月に刊行されています。



聖学院大学大学院

学部卒業生入試科目一部免除 & 入学金減免制度

聖学院大学大学院では全研究科で、学部卒業3年以内の方を対象にした入試科目一部免除、学部卒業生全てを対象とした入学金半額の制度を設置しています。学びのサポート制度として、2年間の授業料で2年間を超えて在学できる長期履修制度や50歳以上の方の学びを支援するシニアコースなどがあります。科目履修や聴講制度は科目単位で受講ができるため学び直しに最適です。資料請求は聖学院大学広報課 (048-780-1707)。



聖学院大学



ボランティア活動支援センターが ブックレットを制作

聖学院大学ボランティア活動支援センターは2019年2月にブックレット『自分とみんなの幸せをつくる ボランティア/市民活動と持続可能な世界 (SDGs)』を発行しました。ブックレットの発行は、2018年9月に聖学院大学を会場として行われたボランティア活動支援センター主催の学生ボランティア団体を対象としたSDGs研修会(ワークショップ)「ボランティアの持続可能な世界」の開催がきっかけです。ブックレットの内容はSDGsの解説やワークショップの開催方法などが研修会の講師を務めていただいたNPO法人エコ・コミュニケーションセンター代表理事、森 良氏によって執筆されています。ブックレットはボランティア活動支援センターやNPO法人エコ・コミュニケーションセンターが関わるワークショップなどで配付される他、希望のあった高等学校には無料で配付しています。



聖学院大学



セカンドキャリア77歳の新生が入学

聖学院大学は2018年度より全学部を対象に「セカンドキャリア支援授業料減免制度」を実施しています。これは満40歳以上の入学者の授業料を50%減免するもので、2019年度の入学者の3名がこの制度を利用しています。今までの聖学院大学の学部への入学者として最高齢となる77歳の鈴木いね子さん(日本文学学科)はテレビ東京「日曜ビッグバラエティ 池上彰のニッポン先取り～今知っておきたい重大ニュース～」の「人生100年時代」をテーマとした特集で密着取材を受けて、5月12日(日)に放映されました。



聖学院中学校・高等学校



文芸同好会 「第6回高校生直木賞全国大会」に出場

4月28日(日)、千代田区麹町の文藝春秋社で行われた「第6回高校生直木賞全国大会」に、文芸同好会の高校2年生、樋口さんが出場しました。高校生直木賞とは、全国から28校の高校生が集まり、昨年度の直木賞候補ノミネート作品の中から「高校生の視点による一作」を選び、作家を表彰するという企画。当日は、前年度受賞者・綾瀬まるさんによる講演の後、選考委員会が開かれ、4時間の討議の結果、「熱帯」(森見登美彦著 文藝春秋)が、「第6回高校生直木賞」に選出されました。



聖学院メサイア合唱団



第14回聖学院メサイア合唱団公演

4月29日(月・祝) 聖学院中学校・高等学校講堂にて第14回聖学院メサイア合唱団公演が開催されました。日本ではクリスマスの時期に演奏されることの多い「メサイア」ですが、この曲はイエス・キリストの降誕、受難、復活の3部構成になっています。イエス・キリストの受難と復活を覚えるイースターにふさわしく、キリスト教教育を土台とする聖学院から生まれた聖学院メサイア合唱団の「メサイア」が講堂に響き渡りました。また、演奏終了後には東日本大震災を覚えて「釜石ふるさと寄付金」への会場募金が行われました。

女子聖学院中学校・高等学校



ACEF事務局長を迎えての礼拝

4月23日(火)の高校礼拝ではACEF(アジアキリスト教教育基金)の小田哲郎事務局長にお越しいただきお話をいただきました。ACEFとはバングラディッシュの子どもたちに「寺子屋を贈ろう」という趣旨で発足した団体です。女子聖学院中高はACEFの発足当初から、毎年、記念祭の売上で寄付することでその活動の応援をしています。また、ACEFが企画運営しているスタディツアーに参加し、その体験を執筆して出版した女子聖学院中高の卒業生もいます。



聖学院小学校



スクールランチ

5月に入り、1年生がスクールランチ(給食)デビューをしました。スクールランチは各学年1名ずつ、6人で一つのテーブルを囲みます。縦割りグループで食べるので「お兄さん、お姉さんのように残さず食べよう!」「低学年のお手本になろう!」という気持ちがお互いに芽生えるようです。最初は緊張して話せなかったグループもありましたが、高学年のあたたかいフォローのおかげで、楽しい時間となりました。



女子聖学院中学校・高等学校



中学1年生からの国際理解教育

4月25日(木)~27日(土)までの3日間、中学1年生を対象として「Global 3day Program」を実施しました。このプログラムは、国際理解を深め、英語で考え、英語で発信できる力とアサーションを養う、女子聖学院中高を代表する行事の一つで、中1~高2の必修プログラムです。中1生にとっては入学して間もない時期での初めての国際プログラムなので、スタート当初はだいぶ緊張している様子でしたが、アイスブレイクなどを実施しながら段々と打ち解けていき、プログラムの3日間で英語を学ぶ楽しさを体験することができました。最終日のラストでは1年生全員がチャペルに集まり、選出者6名によるスピーチ発表が行われ、たいへん盛り上がりしました。



聖学院小学校



運動会

5月18日(土)、運動会を行いました。過ごしやすい気候で、まさに運動会日和となりました。この日のために競技種目はもちろんのこと、開会式や応援合戦、聖小体操など、様々な練習に励みました。当日は観客の熱の入った応援に、子どもたちも気合十分。玉入れや騎馬戦、紅白リレーなど、どの競技も白熱した試合になり、素晴らしい運動会になりました。閉会式では無事に運動会を終えられたことへの感謝のお祈りを捧げました。



聖学院幼稚園



こどもの日お楽しみ会

4月26日(金)、「子どもの日」のお楽しみ会を行いました。聖学院幼稚園は毎年ゴールデンウィーク前に子どもの日をお祝っています。ホールではみんなでリズム遊びをしたり、大きな鯉のぼりをくぐって遊んだり、少し早い「子どもの日」を満喫しました。おやつは子どもサイズの柏餅をいただきました。美味しくてみんなの顔もニコニコ。各自で作った世界に一つだけの「鯉のぼり」はお家に持って帰りました。子どもたちがこれからも元気に成長しますようお祈りしています。



聖学院幼稚園



母の日礼拝・参観

5月8日(水)、「母の日礼拝・参観」を行いました。ホールで礼拝を守ったあと、クラスに移動してお家の方に参観もしていただきました。年少組はおやつタイム、年中組はゲーム、年長組は製作、それぞれのプログラムを楽しく過ごしました。最後は母の日の贈り物として「似顔絵」をプレゼント。大好きなお母様を抱きしめて「大好き!」の気持ちを伝える子どもたちも見られました。お母様も子どもの成長を感じられる1日になったことと思います。



聖学院みどり幼稚園



つくしの会

4月27日(土)、中学生以下の卒園生をお招きする「つくしの会」を行いました。当日は約160名の方が集まってくださいました。卒園生や保護者の方が遊びに来てくださると、先生方も嬉しい気持ちになります。今年は学年別に分かれてゲームを行い、最後は全員で讃美歌を歌って礼拝を守りました。卒園生や保護者の方から近況報告も受け、またその後の活躍を知ることができて、園内は楽しい交わりの一と時となりました。



聖学院みどり幼稚園



親子遠足

5月10日(金)、清々しい天候の下「親子遠足」を実施しました。今年の場所は市民の森・見沼グリーンセンターです。開会礼拝を守ったあと、クラス毎に分かれて、それぞれプログラムを楽しみました。「りすの家」にも足を運び、子どもたちは大喜び。お昼のお弁当をみんなで食べたあとは自由時間です。子ども同士、または親子で自由に過ごしました。最後はさよならの会を行い解散となりました。子どもたちはもちろん、保護者同士の良い交流の場になったのではないのでしょうか。



Our Mission

ボランティア活動支援センター
（大学キャンパス）



聖学院の「神を仰ぎ 人に仕う」という建学の精神の中で「人に仕う」の部分、他者への貢献の実践という理念のもとで存在しているセンターです。

主な業務は、地域の方からのボランティア活動の相談を受け、それをボランティア活動に参加したい学生につなぐコーディネーターです。専門職として、ただの窓口ではなく受け入れ先と学生がお互いにハッピーになるよう、双方の思いを丁寧に確認しながら進めていきます。また学生自身が企画したボランティア活動の相談に乗り、実現の後押しをするのも役割の一つです。

私たちは学生にボランティア活動を通して本気のチャレンジをしてほしいと思っています。最初から意欲のある学生は、自分でボランティア活動の情報を集め行動します。ボランティア活動支援センターを必要としている学生は、何かしたいけどどうしたらいいかわからない、そういう学生です。彼らの漠然とした思いに寄り添い、何気ない会話から垣間見える本気の種を見つけ出し、一緒に一歩を踏み出すことが私たちの関わり方の本領だと思っています。最初、下を向いていて挨拶もできないくらいの学生が、活動先の人との出会いを通して急激に変わっていくことがあります。日々起こるそういった変化を目の当たりにできるのは、やり甲斐もあるし幸せなことだと思います。

ボランティア活動は、社会課題に対して多様なアプローチができます。正しいと思われている一つの価値観ではない別の価値観を発信していけるということボランティア活動を通して一緒に学んでいけたら嬉しいです。しかも発信だけではなく、本当に新しい価値観を作っていけるとすれば社会にとっても大切な営みになります。そういうチャレンジをこれからもしていきたいです。

Our Mission

1. 学生のチャレンジを応援する
2. ボランティアが当たり前の選択肢になっている、そういう文化を作る
3. 困っている人や辛い思いをしてる人に心を寄せられる、そのきっかけの場であり続ける



●STAFF

島村宣生・川田虎男・山田裕太
芦澤弘子・丸山阿子・数井美由紀・永松実梨

●オフィス

大学1号館 1F

※ボランティア活動支援センターは2018年11月、厚生労働大臣により継続的活動と功績を表彰されています。

聖学院歴史探訪

#5 聖学院を つくった人々 -クローソン-



女子聖学院の初代院長[現在の校長]となったバーサ・F・クローソン先生は、1868年、アメリカ合衆国のカンザス州に生まれました。信仰深い両親のもとで成長したクローソン先生は、16歳のとき腸チフスで両親を失いましたが、大学時代通っていた教会のC.S.メドバリー牧師から大きな影響を受け、宣教師になることを決意しました。

クローソン先生が最初に来日したのは、1898年のことでした。秋田と大阪で伝道に従事し、その後一時休暇で帰国しますが、そのとき日本の宣教師団は先生を新しく開設される女子聖学院の院長にすることを決定します。初め、伝道こそ自分の使命と考えていたクローソン先生は悩みましたが、メドバリー牧師の励ましを受け、「キリスト教教育は、伝道の一つの方法である」と受け止め、それを受諾しました。

1905年11月1日、女子聖学院は東京築地で神学校として発足しました。最初の生徒は10人しかいませんでしたが、そのときもメドバリー牧師から送られてきた手紙に、1人の教師と12人の弟子で始まった主イエスの学校 [=教会]が、今では全世界に満ちているということ書かれていて、クローソン先生は大いに励まされたそうです。

クローソン先生は1932年に日本を去りましたが、日本への愛と奉仕にささげられた34年を振り返り、次のように述べています。「何と光栄な生涯を送ったことでしょう。自分の一生をかけた仕事が、成長し発展していくのを見とどけながら生涯をおくる特権をあたえられるとは、何とすばらしいことでしょう」。この言葉が示すように、クローソン先生は宣教師としての人生を歩みぬかれ、1957年地上の生涯を終えられました。

出典:聖学院・女子聖学院中学校高等学校 聖書科教科書編集委員会編『神を仰ぎ人に仕うー召命に生きた人々ー』改訂版,聖学院大学出版会,2014年 (出典より一部変更)

学校法人 **聖学院** 理事長/清水 正之 院長/山口 博
〒114-8574 東京都北区中里3-1 2-2 Tel 03-3917-8351
ホームページ <https://www.seig.ac.jp/> E-mail pr_h@seigakuin-univ.ac.jp

■さいたま上尾キャンパス

聖学院大学

・政治経済学部/政治経済学科 ・人文学部/欧米文化学科 日本文学学科 児童学科 ・心理福祉学部/心理福祉学科
学長/清水 正之 創立/1988年 〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1番1号 Tel 048-781-0925

聖学院大学大学院

政治政策学研究所/アメリカ・ヨーロッパ文化学研究所/心理福祉学研究所
創立/1996年 〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1番1号 Tel 048-780-1801

聖学院みどり幼稚園

園長/山川 秀人 創立/1978年
〒331-0045 埼玉県さいたま市西区内野本郷820 Tel 048-622-3864

■駒込キャンパス

聖学院 中学校 高等学校

校長/角田 秀明 創立/1906年
〒114-8502 東京都北区中里3-12-1 Tel 03-3917-1121

女子聖学院 中学校 高等学校

校長/山口 博 創立/1905年
〒114-8574 東京都北区中里3-12-2 Tel 03-3917-2277

聖学院小学校

校長/佐藤 慎 創立/1960年
〒114-8574 東京都北区中里3-13-1 Tel 03-3917-1555

聖学院幼稚園

園長/佐藤 慎 創立/1912年
〒114-8574 東京都北区中里3-13-2 Tel 03-3917-2725

●インターネットでの寄付のお申し込みについて

クレジットカード(VISA、MasterCard)をお持ちの方は、お申し込みから入金まで、PC、スマートフォン、携帯電話からインターネットによるお手続きができます。下記URL、QRコードにアクセス下さい。

<https://www.seig-asf.jp/fund/>



住所変更・お問い合わせは下記までお願いします。

学校法人聖学院ASF事務局 Tel 03-3917-8352